

6月22日 原風景

「こうちゃんの田舎どこなん?」。向かいのしんちゃんにそう聞かれて、私は応えることができなかった。幼稚園の頃だったろうか。私の中での「田舎」は「都会」の反対。しんちゃんが言う「田舎」はどうも「ふるさと」のここのようだ。そのときの私は、どちらの意味の「田舎」も持ち合わせていなかった。

私には、生まれた地である神戸の記憶がほとんどない。物心つく頃には尼崎に来ていたから。かといって尼崎のこともほとんど知らない。私は「根っこ」を持っていなかった。

高校に入った頃、「原風景」という言葉を学んだ。言葉というより「概念」といった方が正しいかもしれない。このとき私は不思議な思いにとらわれた。「田舎」を持たない私には「原風景」も存在しないような気がしたからだ。

「原風景」とは、その人の「原初となる体験(風景)」というような意味。この概念は「田舎」を持たない私に、自分の原点について考える機会を与えてくれた。

「火垂るの墓」という名作アニメがある。昔、父親から神戸大空襲の話聞いたことがあったが、映画はまさにそのとき、そしてその神戸が舞台だ。私は、焼夷弾が降り注ぐ神戸の町を逃げ惑う人々の中に、父の姿を見ていた。清太が石屋川沿いを歩くシーンで、遠景に御影公会堂が描かれる。映画を見ながら、なんとなく懐かしい気持ちを抱いた。それは、父の話と映画が重なるからだと思っていた。

数年前、所用で石屋川近くを訪ねた。遠景に「御影公会堂」が見える。その近くに生家があった私は、毎日のようにこの風景を眺めていたはずだ。ハッとした。それはまさに私の「原風景」だった。

モダンな外観。荘厳な内装。丸みを帯びた優しさの中に決して揺るがない固い信念が隠されている。幼いながら、その佇まいに畏敬の念を抱いたに違いない。私が廃校になった小学校や明治、大正期の建物にノスタルジーを感じるのは、おそらくそのためだろう。

今ならあの問いかけに応えられる気がする。「しんちゃん、ぼくの田舎は神戸やで」と。

